
三男坊異世界に立つ

サイトウレイジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三男坊異世界に立つ

【Nコード】

N1410X

【作者名】

サイトウレイジ

【あらすじ】

異世界に勇者として召喚されアチラで嫁を貰い帰ってきた先祖を持つ霧崎家

先祖の勇者としての力かアチラの嫁が原因か

霧崎家の周りではファンタジーやSF、オカルトといった非日常的な出来事が日常的に起こるようになってしまったのである。

そんな霧崎家の三男坊霧崎忠信は、なじみのバツティングセンターで会心の当たりを叩き出し、気が付くと見知らぬ森の中にいた、こ

れまでの経験から異世界に迷い込んだと検討を付けた忠信は帰宅する
ための

方法を探し始めるのであったが・・・

三男坊、霧崎家を思い返す（前書き）

操作を誤り短編として投稿してしまいました。
短編の方と内容は一緒に御座います。

三男坊、霧崎家を思い返す

この俺、霧崎忠信の事を語る前に我が霧崎家の異常性を知ってもらいたい。

何世代前か忘れたが我が霧崎家には異世界なる所に勇者と呼ばれ出され、世界を平和にしたのち向こうで嫁さんを貰いこちら側へ帰ってきたご先祖様がいたらしい。

そのご先祖さまの勇者の力とやらのせいか、あるいは異世界人の嫁さんのせいなのか

我が家系ではファンタジーであるとかSF、あるいはオカルトと呼ばれる出来事に遭遇する確率が非常に高い

驚くなかれその生涯非日常的事柄への遭遇率250%超、これは人生で何か非日常的な事柄に出会い、その後にもた別のケースの非日常にほぼ確実に巻き込まれるという事を意味している、もはや日常である。

少しでも霧崎家の異常性が理解してもらえれば幸いだ。

そんな家系で17まで生きていけばチョットした不思議

例えば長男が学生時代の仲間を集めて超能力探偵事務所なんてふざけた名前の仕事を立ち上げたり。

大学生の二男に彼女ができたと思えば齡300年を超える大妖怪であつたり。

小学校に上がったばかりの弟が連れてきた友達とある小国のもても高貴な身分の方であつたとか

このような出来事は非日常とはカウントされない、いや非日常（笑）なのだが。

それでは一体どのような事が本当の非日常なのか、それはそう、例えば非日常体質最初のご先祖さまの様に異世界に召喚される事でありとか

例えば俺の様に学校からの帰り道、馴染みのバッテリーセンターで会心の当たりを打つと同時に見知らぬ森の中にいたりすることだ。

さて、ここが異世界だとして、一体どうやって帰ろうか…

三男坊、霧崎家を思い返す（後書き）

初めての小説で御座います

いわゆる小説処女うやつです

英語でノベルヴァージン

何が言いたいのかといいますと

私「初めてだから優しくしてね／＼／」

といった感じで御座います

やりたい放題、行き当たりばつたりの拙い妄想小説ではありますが
皆様の良い暇つぶしになれば幸いとおもいます

三男坊、異世界に迷い込む

馴染みのバッティングセンター、右から二番目のボックス、相対するは超高校級バーチャルピッチャー

（実戦タイプ）、ここは俺の戦場だ。

ランダムに投げられる80キロのスローボールから150キロの剛速球、手元で急激に曲がる変化球それら全てを球場ならば左中間にあたる場所に

そびえるホームランターゲットに叩き込む、それが俺の使命だ。

今までに投げられた球数は19球、俺がホームランターゲットに叩き込んだのは9球、次の球、このラストの球をターゲットにブチ込みさえすれば

目標ホームラン数達成となり俺は少しかりの名誉と商品を手に入れる事が出来る。

対面するバーチャルピッチャー（超高校級実戦タイプ）が投球モーションに入る

大きく振りかぶって———投げた。

その瞬間俺は確信する、カーブだ、間違いない。

全身のバネを使い力を腕からバットへ、バットからボールへと移してゆく、そして振り抜く

会心の当たりだった、見るまでもなく打球は矢のようにターゲットへと飛んでいく、俺は目を閉じ余韻に浸りつつ目標達成のファンファーレを

———鳴らない、祝福のファンファーレが鳴らない、もしかして微妙に打球がずれていたのだろうか、コレはいけない、ホームランでも無いのに

目をつぶり悦に入る男、なんて格好悪すぎる、ここは「今のは実際の球場をイメージしていたのでホームランターゲットは全然関係な

いんですよー

本当の試合だったらホームランでしたねー」的なオーラを出しておこう、と恐る恐る目を開けると……

見知らぬ森にいた

図鑑の中でも見たことが無いような巨大な木々がそびえ立ち、鳥のさえずりや獣の息遣いを感じる

そんな見知らぬ森だった

気が付くと知らない場所にいた、というのは自分史の中では中々にレアなケースだ。

一昨年に伯父さんの知り合いの宇宙人にワープ装置を使われた時以来だ、その前は小学生の頃叔母さんの転送魔術なる怪しげな秘術で日本中を転々と飛ばされまくった時だったか、宇宙人の謎技術にせよ、魔女の謎秘術にせよ人為的な強制移動の時は胃がひっくり返るような思いをしたものだ。

今回はホームランの余韻に浸る余裕があつたくらいだ、人為的な強制移動ではないだろう。

となると異世界に迷い込んだという可能性が一番高いように思える。異世界、良い響きだ。

現実世界のしがらみから解放された世界！

剣と魔法、陰謀と策略が巡るめく世界！

美女美少女との重婚が認められた世界！！

なんと素晴らしいのだろう。

俺には世界ごと逃げ出したいしがらみやハーレム願望なんて無いが。もちろん陰謀や策略なんてものも御免こうむる。

そもそもココが異世界であつたとして、どのようなタイプの異世界

か分からない。

こちらの一年は現実世界の1時間です、といった都合の良いタイプの異世界なら良いが

同じだけの時間が流れるタイプの異世界だと困る、俺は花の男子高校生なのだ、現実世界での三十日以上コチラ側にいてみる、出席日数が足りなくて留年してしまう。

それだけは避けたい、否避けるべきだ、避けなければならない。

一刻も早く帰宅せねばなるまい。

俺は、というか俺たち兄弟は、かつて異世界に迷い込んだ、あるいは召喚された親戚連中から異世界に迷い込んだ時にするべき事、というアドバイスを受けたことがある。

まず第一に食糧、飲み水の確保だ、家は代々体が丈夫な家系なので、最悪木の根でも齧つてろ、との事であった。

その次に言葉の通じる存在との接触、言葉が通じなければ文字通り話にならず、情報収集もままならない。

第三にユーモアを忘れない心だ、度重なる非日常に見舞われる霧崎の人間として、もし異世界に迷い込んだとしても、タダで海外旅行に行けてラッキー位に考えておけ、だそうだ

幸いにもこの森は豊かそうな森だ、食糧には困りそうにない、飲める水も湧いているだろう。

とりあえず一直線に歩き続け、言葉が通じる存在との邂逅を待とう。森の中で出会えれば良し、森を抜ければ見通しが良くなり、集落など発見しやすくなるだろう。

かくして、霧崎忠信は留年を避けるため異世界から帰宅する方法を探し始めるのであった。

行き当たりばったりな方法で…

三男坊、異世界に迷い込む（後書き）

超高校級バーチャルピッチャーから10本以上ホームランを打つと近所の喫茶店のお食事券がもらえます、
ケーキと紅茶がおいしいと評判のお店です

三男坊、異世界人に出会う

森の中を四時間ほど歩いただろうか、既に日は落ち、辺りはすっかり暗くなっている。

体力的には問題無いが、如何せん周りが見えない。

土地勘のないこの森で、暗闇から獣に襲われでもしたら、流石に困る。

いくら叩いて良し、突いて良し、斬って良しの万能武器バツトを持っているからと言って無敵という訳ではないのだ。

丁度良くもたれかかって背中が痛く無さそうな大樹をみつける、今日はここで休憩にしよう。

近くに獣の匂いはしないし、近づいてくれば音でわかるだろう。

俺は辺りを警戒しながら眠りに付いた。

夜明けと共に目が覚める、この世界は春か夏なのだろうか、夜冷えはせず森の涼しさが心地よい。

さて、今日も真っ直ぐ歩こうか。

小腹がすいたので道中の木々に生っている実を毒見がてら少しずつ食べて歩く。

野生の実特有の渋みが口の中に広がりそのあとから甘酸っぱさがやってくる。

正直美味しくはないが舌の痺れも腹痛もない、この辺りの実には毒はないようだ、しばらくの間の主食になるかも知れない、しっかりと覚えておこう。

とりあえず腹は膨れたがやはり食べ盛りの男子高校生としてはガツツリと肉なんかを食べたい、魚も捨てがたいがやはり肉だ、塊のステーキなんか素敵ではないか、歯ごたえのある肉にガブリと噛みつき食い千切る、最高だ、だいたい魚は若い俺にはまだ早いのだ、世の中年も年をとると肉より魚が食べなくなる、などと言っているではないか、つまり肉〃若者の食べ物、魚〃年寄りの食べ物なのだ。と文字通り肉欲まみれの思考で歩く俺の耳に微かだがせせらぎの音が聞こえる。

心地よい空気の中せせらぎの心地よい音を聞くと心が洗われるようだ、心がきれいになると肉より魚が食べなくなる、DNAだとかナンドとか、頭に良い成分がたくさん詰まっているのだ、肉食系や草食系だなんだと言われているが魚食系とは言われない、世の中とは常に新しい価値観を求めており俺は魚食系男子の先駆けとなるのだ、つまり何が言いたいかというのは魚食べたい、魚サイコー。

当初の真っ直ぐ歩く、という指針を忘れ森中を突き進む、徐々に水の流れる音がする、この音だと中々大きな川のようにだ少なくとも魚の一匹や

二匹はいるだろう、アユなら塩焼き、マスならムニエルだ、刺身も食べたい気がするが川魚は体内に寄生虫が多数生息しているので生で食べる

ことが出来ないのだ。

肉欲改め魚欲に支配された俺が森を抜けた先には

川底まで見えるほど透き通った川と多数の魚群、そして水浴びをする全裸の異世界人であった。

美というものを体現したかのような無駄の無い引き締まった体、水に濡れ輝く金系の様な髪

何処までも吸い込まれていきそうな深い青色の瞳、唯一つ惜しむべ

きは……

それが男であるということだ。

「えっと、山賊か何かなのかな、金目の物は持ってないんだけれど、どうやら言葉は通じるようだ、無防備に水浴びをしているというところは近くに集落があるということだろう。」

「計らずもすべきことその一とその二を達成してしまったようだ、ユーモアは知らん。」

「あのー、聞こえてますか？」

これはいけない、話しかけられたのを無視しては紳士の名折れ、円滑なコミュニケーションを図らねば。

「いや、これは失礼、道に迷って森を抜けた所であなたに出会いまして、少し驚いていたんですよ、ところでこの川の魚は食べられますか、

森の中の果実しか食べておらず、恥ずかしながら空腹で」

礼儀正しく挨拶をしながらさりげなく自分の欲しい情報を聞き出す、これぞ紳士の話術、実に華麗だ。

「冒険者の方でしたか、御一人での森超えは大変でしたでしょう、これから朝食の分の魚を取るところです、冒険者さんの分も取りますので

我が家で一緒にしませんか」

とても有りがたい申し出ではあるが、すでに魚を食べる口になっていた俺には少しの間も惜しい。

そこでバットを大上段に振りかぶり、水面に叩きつける五メートル程水しぶきが上がり、雨となって降り注ぐ、二、四、六、八、十 運よく十一匹の魚が水面に浮いてきた。

「お誘い有難う御座います、魚はこれで足りますかね」

これからの事は、とりあえず朝食を頂いてから考えよう。

三男坊、異世界人に出会う（後書き）

バットとはすばらしいものなのです、

かの有名な最後の幻想7の雲のユニーク武器はバットでした

私を暗黒魔道に引き込んだ軽い小説のヒロインも呪文を唱えれば殴ったものが元通りになる不思議なバットを持っていました

世界のイチローの活躍を支えているのも何を隠そうバットなのです

三男坊、再び森に入る

川で出合った男、ウィリアムの村への道中、自己紹介がてら様々な話をした。

冒険者という世界中を旅する人とその援助をしている組合があるということ

この世界には魔術というものがあること

魔術は才あるものにしか使えず、使えれば平民からでも下級貴族になれるということ

ウィリアムには妻が居て7歳になる娘が居るということ

俺が故郷へ帰るための方法を探していること

ウィリアムは二週に一度村に来る行商人との交渉役のようなことをしていること

その行商人が三日後に来るのでそれについていけば街まで行けるということ

それまでウィリアムの家で厄介になるということ

その代わりに労働力を提供すると申し出たこと

森を抜け、村に着く頃には太陽も上がり始め、暖かくなっていた。

「ようこそ、アートドルフへ、なんにも無い所ですし、短い間ですがゆっくりしていただくさいね」

異世界にきて初めて訪れた集落は村だった、絵本や童話で見たような茅葺き屋根のお家と畑、村の中央には広場が有り、その奥に他の家よりも二回りほど

大きい家があった、村長の家だろうか。

「さ、タダノブ、私の家はこちらだ、妻と娘を紹介するよ」

ウィリアムもそうだが、奥さん、エドヴィージェもとても良い人だ、愛する夫が連れてきたからって、金棒をもった見た事のない服を着た男（俺はワイシャツの下に柄物のＴシャツを着て下半身はスラックスだった）が朝食の席に突然現れれば、少しは警戒するのではないだろうか、それがこの奥さん

「あらあら、しばらく賑やかになるわね」

だ、この家族の中で俺を警戒しているのは一人娘のジェミーだけだ、警戒というより人見知りの様な気がするが。

ともかくガチンコ漁法で手に入れた魚はエドヴィージュの手により塩焼きになって俺たちの胃に収まった、美味しかった。

働かざる者食うべからず、すなわち食ったからには働かねばなるまい。

「さて、ウィリアム。行商人が来るまでタダ飯を食い続ける訳にはいかない。知つての通り、魚なら何匹でも取ってこれるし、力と体力には

自信がある、俺に出来る事なら何でも言ってくれ。」

「タダノブの金棒は武器なんだよね？ それじゃ、村の人たちと一緒に害獣狩りを手伝ってもらおうかな。」

アートドルフでは麦の何割かを税に、残りを自分たちの食用であるとか町への輸出用に使っているらしい。

その麦だが、種を撒いてから収穫するまで、ほぼ全ての期間その実や茎を害獣（純粋な獣だけでなく下等な魔物も含めるらしい）に狙われていているらしい。

そのため定期的に森へ入り害獣の数を減らしており、害獣の毛皮であるとか肉、牙などは行商人にそれなりの値段で売れるらしい、

麦を守れて収入にもなる、害獣狩りは一粒で二度美味しいのだ。

弓を持ったウィリアムと共に村の広場まで行く、広場には弓や槍をもった若い男たちが集まっており真剣な表情で何かを話し合っている。

その話しの中心にいる男にウィリアムが声をかける

「アーノルド、何かあったのか？」

アーノルドと呼ばれた男が応える

「ウィリアムか、そっちの男は誰だ？」

俺はウィリアムの世話になっっている冒険者で今日の害獣狩りに参加するつもりだ、ということ伝える

「冒険者か、都合が良いときに来てくれた。実は森が妙に静かなんだ」

そういえば、こちら側に迷い込んできた時には小鳥のさえずりや、小動物の姿を見かけたが、夜に休憩したとき、そして今朝ウィリアムと出会った時には鳥も動物も見かけなかった。そのことをアーノルドに伝え、森が静かな事の何が問題なのか尋ねる。

「本来のこの森は、俺たちが狩っている害獣の他にも多数の動物や魔物がすんでいる。それらの姿が見えないということは今朝、タダノブの言っていた事が本当ならば昨日の夜からこの森に住む魔物より格段に強い魔物が森に迷い込んできた可能性が高い。」

この森に住む魔物は魔物の中でも動物に近いらしく、自分よりも強い生物の気配を感じると隠れるのだ、とウィリアムが補足してくれた。

「しかしそれなら森に入る必要はないだろう、害獣は麦を食べに来ないんだろ。何が問題なんだ」

俺の頭に浮かんだ疑問にウィリアムが答える

「害獣は問題無いんだけどね、その迷い込んできた魔物が問題なんだ、私たちが狩れる魔物ならば良いけれど手に負えなかったら、危険な魔物が老人や女、子どものいる村に降りて来るかもしれない、組合に連絡して冒険者を派遣してもらいたいんだけど、もし今すぐ魔物がやってきたらとても間に合わないよ。」

森がどの程度の大きさか分からないが、俺が半日ほど歩けばこの村にたどり着くのだ、その強い魔物とやらがいつ村にやってきてもおかしくないだろう。

「二、三人の少人数に分かれ森を探索する、魔物を発見することを第一として、無理に戦おうとはするな、危なく鳴ったら猟笛を吹け」アーノルドの言葉で村の男たちが散り散りに森に入って行く、俺はウィリアムとアーノルドと三人で行動することになった。

三男坊、再び森に入る（後書き）

どうでもよい話ですが霧崎四兄弟の名前は上から
仁義^{じんぎ} 礼智^{れいち} 忠信^{ただのぶ} 考悌^{たかやす}
です。

三男坊、VS異世界の魔物

ウィリアムとアーノルドと共に辺りを警戒しながら森を進む。

今朝は脇の果実や魚に気を取られ意識していなかったが、確かに動物の気配がしない。

「アーノルド、タダノブ。あの木を見ろ」

ウィリアムの視線の先には俺の頭の辺り、つまり180センチ弱程の高さで真つ二つに折れた木があった。

「森に迷い込んでくる魔物であの高さの木を折れる力を持った魔物、オーガか」

アーノルドの顔色が変わったその時、甲高い笛の音が聞こえてきた。「何処かの組が会ったようだ、オーガが相手なら逃げることも難しい、援護に行くぞ」

ウィリアムとアーノルドを追って笛が鳴った方へと走り出す。

見えた、村人とオーガだ。

オーガは人間より三回りほど大きい枯葉色の巨人だった、その巨人は拳を振りかぶり傷ついた仲間を庇う男にに襲いかかる寸前だ。

「ウィリアムッ」

アーノルドが呼びかけるより先にウィリアムが走りながら矢を番え

——撃つ。

矢は風を切りオーガに刺さる、拳を振り下ろす邪魔はできたが、致命傷には程遠い。

だが、俺にはそれで十分だ。

オーガに矢が刺さり、こちらに注意を向けた瞬間、加速する。

一步踏み出すことに確実に速度を上げていく、一步、一步、また一步。

そして最高速に達した俺は、速度を殺さずにオーガの脇腹にバットの根元を当て、すれ違いざまに——引く。

肉を断つ確かな手ごたえを感じオーガとすれ違い、両の踵でブレーキをかけ、振り返る。

こちらに背を向け、絶叫するオーガの左の脇腹には今しがた俺が付けた切り傷がある

しかし、それもコイツを絶命させるには至らなかったようだ

「ウィリアム、怪我してる奴等を連れて村に戻れ、コイツは俺が引き受ける」

オーガから目を離さずにウィリアムに伝える

「任せても良いのかい、タダノブ」

「コイツを引き留める位何の問題もない、コイツの死体を村に持って帰るのには、人手が必要だな」

ニヤリ、とワイルドに格好よく笑ってやる。

オーガ越しで俺の顔なんぞ見えちゃいないだろうが。

「分かった、なるべく早く戻ってくる、無理はしないでくれ」

ウィリアムとアーノルドそして名も知らぬ男が怪我をした男に肩を貸し遠ざかって行く。

遠ざかるウィリアムたちを追えば、後ろから俺に狩られるということが分かる程度にはこの魔物は賢いようだ

賢くても、俺に狩られるという事実に変化はないが。

オーガが振り向き飛びかかってくる、手負いにしてはかなりの速度だが避けられないほどではない、

飛びかかる巨軀を左側に一步前へ出て避け、今度は右の脇腹を斬りつけてやる。

両の脇腹を斬られよろめくオーガの腰にバックハンドでグリップを叩き込む。

普通の動物名なら、今ので背骨が折れていてもおかしくないのだが、このオーガという生物、中々にタフなようだ。

怒りに我を忘れてか、それとも至近距離へ入り込まれるのを警戒してか、オーガは左右の手を振り回し向かってくる

駄々っ子なら可愛い仕草だが、こいつは二メートルを超える筋肉の塊だ、洒落にならん。

次々と繰り出される連撃を避け、左側に回り込む、そして伸びきった右手めがけバットを

「——破ッ」

大上段から振り下ろす。

振り下ろした数拍後、ボトリ、と音がしてオーガの右手が落ちる。

文字通り「叩き斬る」というやつだ。

そしてオーガの胸を狙い

「——脆」

突く。

バットで貫かれたオーガは何かを呻きながら息絶えた。

それがオーガの中で意味を成す言葉かどうか俺には分からないが、息絶えた。

それから暫くしてウィリアムとアーノルドが村の男たちを連れてやってきた、このオーガ一匹でかなりの金になるから

明日明後日は害獣狩りはしなくてよい、みたいな事を言っていた。

久しぶりの命のやり取りで酷く疲れた、まだ日は出ているが村に戻ったら少し休ませてもらおう。

三男坊、VS異世界の魔物（後書き）

バットに斬撃や刺突属性が付きます、ファンタジーだから走ったまま弓を打つことができます、ファンタジーだから大弓で小船をぶち抜く武将がいます、残念ながら現実です

三男坊、子供たちと戯れる

オーガを村まで運んだあと、エドヴィージュにベッドを貸してもらい、泥のように眠った。

展開こそ一方的だったものの、オーガとの死闘は俺の精神力を疲弊させるには十分なワードワークだったようだ。

目が覚めると、窓から入る光は夕焼け色にかわっていた。

なんてこった、昼飯を食べ忘れた。

いやまで、中世は朝夕の二食だったか、昼飯の代わりにおやつを食べていたんだっただ、はつきりさせないといけない、大切なことだ。がたり、と扉が開く音がする

「おきた？」

ウィリアムの七歳になる娘、ジェミーだったか、が扉を開けて寝室に入ってくる。

「おはよう、には遅すぎるか、おそようジェミー」

「おそよう、えっと……」

「一回しか名乗ってないし、覚えていないのも当然か。タダノブだ、数日の間しか居ないが、改めて宜しく頼む」

ジェミーは幾度かタダノブと口の中で唱えた後、何故か満足げな顔で。

「覚えたよ、タダノブね、もう忘れないから！」

と元気よく答える、元気一杯なのは結構だが寝起きに大きな声は少し堪える。

「それで、どうしたんだ。何か仕事か？」

オーガによって負傷した男手を補う必要があるのかもしれない

「お仕事じゃ無くてね、遊んで欲しいの、お父さんもタダノブと遊んで貰いなさいって！」

どうやら子守りという仕事を任されたらしい。

兄弟の中では三男と下の方に位置する俺だが、それでも年下の子供たちを引き連れて遊んだ事もある。

子守りの一つや二つ、俺にできない事ではない

「よし、任せろ。おままごとでもヒーローゴッコでも何でも来い」
ドン、と胸を叩き、自信のほどをアピールしてやる。

取り合えず皆と合流する、とジェミーに連れられて広場にやってきた。

広場にはジェミーと年の近そうな子ども達が6人待っていた。

「旅人のタダノブだ、短い間だが宜しく頼む、それでいつもは何をして遊んでるんだ？」

おにごっこ、木登り、川遊びなど続々と遊びの案が上がっていく、だが一人の

「旅人って初めて見たから、お話を聞きたいな」

という意見から俺は自分語りを始める事になったのだ

三男坊、子供たちと戯れる（後書き）

すごく間が空きましたね。

特に理由は無いのですが…

コンスタントに投稿されてる方って尊敬しちゃいます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1410x/>

三男坊異世界に立つ

2011年11月27日22時57分発行